
1000TRAP - One

URAYUME

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1000TRAP - One

【Nコード】

N0438D

【作者名】

URAYUME

【あらすじ】

目指せ全校生徒落とし！美少年、城崎深幸が仕掛けるLOVE TRAP×1000。センパイ、コウハイ、男女問わず。で、結局本命はダレ！？

1 - 転校生イコール美少年

それはどこにでもあるような朝の登校風景で、紺のブレザーに身を包んだ高校生たちが今日もがやがやと校内へ吸い込まれていく。言ってみれば、別に取り立てて突っ込むネタも無い平々凡々な景色だ。学力は中の中、真面目な生徒と不真面目な生徒のバランスも取れたこの学校は、良くも悪くも「平和」。荒れていないのは喜ばしいが、どちらかと言うと「不良になるのも面倒臭い」という雰囲気の流れでいて、不完全燃焼な毎日を送っている生徒（ついでに先生も含む）が多いのは疑うべくもない。

だから今日も、「なんとなく」登校して「なんとなく」下校する予定の人間が大半を占めている。

そして明日も明後日も、そんな日々が繰り返される……と、誰もが思っていた。

そうたとえ、突然転校生がやって来たにしろ。

複製品かと錯覚するような生徒たちの群れの中で、一人目立つ後ろ姿がある。

さらりと揺れる薄茶色の髪と、華奢な体に制服のブレザーがよく馴染んだ彼。つい先日この街に越して来て、今日からこの学校へ通うことになった彼の名は、城崎深幸^{しろきみふゆき}。その中性的な名前そのままの綺麗な顔立ちは、ただそこに居るだけで華があつた。

そんな人目を引くタイプだから、転校生だと紹介される前に生徒の何割かは深幸に気付いて、その中でも気の早い人間がさつさと声をかけたりするのである。二年の相葉修治が深幸の肩をとんと叩く。

「見たことないけど、あんた転校生？ すごい目立つ」

相葉に視線を流した深幸がきょとんと応える。

「…目立つ？ なんで」

どこか幼い甘さの残る口調。けれど相葉が驚いたのは口調よりも言葉そのものだ。

「なんでって……、まさか自覚ナシ？ アイドル、…ってかゲームのCGみたいに整ったルックスしてんのに」

うそだろ。相葉がばやくと、深幸の長い睫毛に縁取られた目が数回瞬いて、次の瞬間にその「CGみたいなルックス」に、全てが分かったというような乾いた笑みが浮かんだ。

「ああ、そんなこと」

くだらないとでも言いたげな深幸の台詞に相葉が躊躇する。相葉が何も言わないのを確認して、深幸が付け足した。

「なあそんなの、所詮『見た目』じゃん」

不意打ちのように挑発的に笑った深幸に、相葉が動揺で固まる。

（なんか、やばい。この転校生は）

そんな警告が胸中を過る。だが時既に遅し。

「俺、城崎深幸。よろしくな」

数秒前から反転するように砕けた笑顔を向けられて、相葉は「完全な危険」を察知した。

（やばい。なにこいつ、すごいかわいい）

こうして城崎深幸のエキセントリックな学園生活は、無事幕を開けたのである。

2・I LOVE Uが軽すぎる

「相葉ー、音楽室、どっち？」

21A。相場と深幸は同じクラスだと分かってから、かなりの確率で一緒に行動している。

「二階。あのなー、聞かなくても俺だって行くんだから黙って着いてこいよ」

「ん？ああ、うん。わかった」

転校して来た美少年というシチュエーションで当たり前の如く生徒の視線が集まる中、素直に従う深幸に実は相葉がときめいている、なんてのは誰にも言えない。

（落ちツ着け、オレ！ときめく、ってなんだ！！）

だからもちろん相葉の葛藤なんかは口が裂けても言えない。

「深幸、… あー、昼なに食う？」

「はあ？」

呆れた表情を浮かべた深幸は、直後に笑って相葉の肩をばしっと叩く。

「しっかりしろよ、一時間目だぜまだ。相葉ちゃん」

はははと屈託なく笑う深幸に他意があるのかないのか。それとは無関係にもう止める術もなく相葉の中で実を結んだ言葉は、

恋。

（オイこいってなんだコイって鯉？）

動揺しまくっている相葉に追い打ちをかけるように深幸が真正面から微笑む。それは「地雷」、もしくは「悩殺スマイル」と呼ばれる種類の笑みで。

どくんと跳ねた心臓に形式的な言い訳すら吹っ飛んで、実際相葉が（こいってコイは鯉じゃなくて恋か！）と悟るのに一秒もかから

なかった。深幸危うし。

「相葉、授業遅れる」

ふと気付いた深幸が相葉の腕を取って走り出す。
ちなみに相葉の内心は（やばいやばいやばい、自覚したばっかだったの！！でも嬉しい！）といったところである。

一日の授業がすべて終わって、けれど相葉は何もかもが上の空。

「相葉、調子悪いのか」

「ガタン！！！」

頬杖を付いていたところに、かなりの至近距離で囁かれ、挙げ句顰に手のひらを翳されそうになって、過剰反応した相葉はイスから見事に落ちた。

「っ、いつて……！」

目の前に立った深幸が驚いて固まっている。

「あ、ごめん…、熱でもあんのかと思って、」

相葉がはつと我に返れば深幸と教室にふたりきり。全員が帰った後らしい。

「相葉、大丈夫？」

（危ない。くらくらする…）

「なあ、平気？」

（心配してんの、かわいい）

「相葉、」

（呼ぶな。やばい）

「なあ」

相葉が深幸の腕をぐっと引っ張って、引き寄せる。

「ちょ、相……」

困惑を滲ませて深幸が動きを止める。けれど腕の中で大人しくしていたのは、ほんの一瞬。

きつく拘束されていた訳ではないから、深幸がそのすらりとした指先で相葉の顔を包むのは容易で、目を見張った相葉に口付けるのは

もつと容易だった。離れた唇が、相葉の目の前で綺麗に弧を描く。

「相葉ちゃん、あいしてるよ」

愛の告白ではない、羽のように軽い口調。

「でも、ま、やばいっしょ。これ以上は」

踵を返しかけた深幸の笑顔は、いつも通り。

「じゃあね、また明日」

そう言い残し振り返りもせず教室を出て行く深幸。

ひとり残された相葉は、暫くそこから動くことが出来なかった。

3 - 深幸LOVE 人口増加

朝の教室。いつもの時間。相葉が席についてぼんやりしていれば、深幸が登校して来て鞆も置かず真っ先に寄ってくるはずだ。いつものテンション。いつもの笑顔で。深幸が。

「おはよー相葉ちゃん」

そして事実、見事なほどいつも通りだった。さらさらと揺れる髪、綺麗な笑顔、どこか守りたいと思わせるような華奢な姿。

（うわあヤバイちょうドキドキしてきた！かわいい。昨日の続きしたい！！）

都合良く前日のキスシーンだけを思い出した相葉はうっかり深幸の唇を直視して目を逸らす。

（いやダメだろ大体教室だし朝だし明るいし、皆いるし）

明らかに最重要事項は最後の一文だが、相葉に取っては教室だった、朝だったり、明るいのが更に重大な問題のようだ。さすがは男子高校生。恋は盲目。

「おはよう、って。顔赤いよ、俺に惚れてんのは分かったけどさ」
平然と、ごく自然な会話のように深幸がそう言って、相葉の髪をくしゃりと掻き混ぜた。声を落とした訳でもないから、その瞬間教室が静まり返ったのは言つまでもない。もちろん相葉も固まった一人である。当然だ。

「み、深幸、それは……、その……、」

（髪！！どーしよう。すっげー気持ちイイ……。でもこれってカミングアウト？それってちょっと……ああどうしよう、でもやっぱ手外さんの勿体無い、ああもう、いいか。待て早まるな俺！いやいやでも……、やばい抱きしめたい、なんでだよ好きだよチクショウ、）
悲しいことに相葉の葛藤を端で見ているればその心中など馬鹿でも分かる。

「うん？」

髪を解いた指を頬に滑らせた深幸が試すように笑う。相葉からしてみれば、その仕草が気を失うくらいに色っぽくて目眩がした程だ。しかし。しかしだ、問題はそこじゃない。更なる問題はそう思ったのが相葉だけじゃないということだ。目の届く範囲のほぼ全員の視線を奪ったまま行われた深幸の挑発は、当然ながらそのほぼ全員が目撃することとなる訳で、美少年の危険なスキンシップにくらっとしたのは他に何人もいた。

平たい話、（やばい。ときめく……！！）と感じた人口が増えたのだ。後々嫌でも気付かされることになるのだが、相葉にとってこれはライバル出現の瞬間でもあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0438d/>

1000TRAP - One

2010年10月28日07時10分発行